

あすを拓く

理学療法士から木工作家への転身。
そのチャレンジを軌道に乗せたのは
「鳴子こけし」だった——。
伝統こけしのふるさと鳴子温泉に移住し、
こけし雑貨と地域づくりに思いをはせる。



カガモク
こけし雑貨作家
加賀 浩嗣さん

プロフィール
1976年大阪府高石市生まれ。2004年京都で理学療法士をしながら独学で木工を学ぶ。10年結婚を機に上京、木工作家として本格的な活動を開始する。15年に妻が生まれた大崎市鳴子温泉川渡地区に移住。17年には「準喫茶カガモク」を開店する

都会暮らしに疑問を感じ地元を離れる
田舎へ移住するため理学療法士を目指す

大阪府出身の加賀さんは、大学卒業まで関西で過ごした。「高校、大学と順調に進学し、このまま企業に就職するのかな、と思っていました。でも、就職活動が目前に迫り、今後の将来を考えた時に、『本当にこのまま都会で就職して良いのだろうか』と感じたのです」少し遠回りをしてもいい。地元を離れて今後のことを考えよう——。そう思い立った加賀さんは、大学を卒業後に2年間、長野県や宮城県の栗駒山麓で住み込みのアルバイトをして生活したという。「慌ただしい都会で暮らすより、田舎で暮らす方が自分には合っている。そう思った私は、田舎で生活するためにはどんな仕事をすればいいのか調べました。そこで、理学療法士のことを知りました」

介護やリハビリテーションなど、医療や福祉の現場で活躍する理学療法士。高齢化が進む田舎でのニーズを見込んで、資格取得を目指した加賀さんは、再び関西に戻り京都にある大学付属の養成学校で3年間学んだ。そして、資格を取得後は、京都市内の医療施設で働き経験を積んだ。

この頃から、加賀さんは趣味で木工を始めた。好きだったコーヒーを飲む際に使うと、ナイフ一本で木を削りスプーンなどの小物を作ったという。その後も少しずつ道具をそろえながら独学で技術を磨いた。

この京都での生活が、加賀さんにとって更なる転機につながった。

妻の故郷でみた「こけしのまち」に影響
こけし雑貨制作にのめり込む

「京都での学生時代に交際を始めた女性
が、自分の故郷のことを楽しそうに話してくれたんです。鳴子温泉の豊かな自然や祭りなど、彼女の話を聞いていたうちに、田舎暮らしへの思いがますます膨らみました」彼女が就職のために上京してからも順調に交際を重ね、2010年に結婚。「将来は生まれ育った鳴子温泉に戻って地域おこしの力になりたい」という妻の夢を共有した加賀さんは、夫婦で東京の生活をスタートさせ、移住に向けた準備を進めたという。こうして結婚を機に上京した加賀さんは、木工作家として本格的に仕事を始めた。「最初は、食べていけないかどうか心配でした」と話す加賀さん。その時に頭の中に浮かんだのが、妻の故郷で目にした鳴子こけしだった。

「看板や電話ボックス、マンホールのふたに至るまで、町中がこけしにあふれていた街並みに衝撃を受けました」。加賀さんは、鳴子こけしをモチーフにした箸を制作し妻に提案、夫婦二人三脚でこけし雑貨を進化させていった。

「素朴でシンプルな形のこけしは、どんなものにもマッチします。コーヒーに使うアイテムに始まり、キッチン雑貨や文房具、

アクセサリまで、アイデアが無限にあふれてきました。そして気が付けば、こけし雑貨がメインになっていたんです」

一家で鳴子温泉に移住し夢をかなえる
地元の魅力を内外に発信する

全国各地で開かれたこけし関連のイベントで展示販売しているうちに、雑貨屋に声を掛けられ、コッソツと販路を広げていった加賀さん。2015年に、2人目の子どもが誕生したタイミングで鳴子温泉への移住を果たした。

そして、17年の6月、「準喫茶カガモク」を開店。住み込みのアルバイト時代に学んだという廃材建築のノウハウを生かし自分で店を建てたという。

「様々な人たちが自由に集まって、まちの未来を一緒に考えて考える拠点になれば」と思い店を作りました。地元を離れた妻の友人や、鳴子温泉に移住してきた方と定期的に話し合っています」と話した。

12月、加賀さんは地元の小学校で箸づくりの出前授業を行った。

「こけしをモチーフにしたおもちゃを持って行ったのですが、子どもたちが夢中で遊ぶ姿に、こけしが持つ力をあらためて感じました。ものづくりを通して、多くのみなさんに地元の宝物を再発見してもらえよう、この地で頑張っていきたいですね」と語る加賀さん。今日も小さな木片を削り、新しい命を吹き込んでいく。



工房でこけし雑貨制作をする加賀浩嗣さん。材料には、伝統こけしでも使われるミズギがよく使われるという。数センチほどの小さな木片を木工旋盤で削り、様々な作品を生み出している

こけしは、江戸時代末期に東北各地の湯治場で木製の椀や盆などを手掛けていた職人が、子ども用の玩具として作り始めたのが始まりとされている。大崎市の鳴子温泉でも「鳴子こけし」が、今もなお工人たちによって作られ、脈々と技と伝統が受け継がれている。

「私がつくっているのは、鳴子風こけし雑貨です。東京から妻の故郷である鳴子温泉への移住を考えた時、自分がここでできることは何だろうと悩んだ末、行きついたのがこけし雑貨の制作でした」

こう話すのは、鳴子こけしをモチーフにしたミニチュアサイズのこけし雑貨を手掛けている加賀浩嗣さんだ。

「鳴子こけしは、世界に誇るこの地域の個性だと思っています。今までこけしと縁がなかった若い人たちにも、魅力を伝える橋渡しができればと思っています」と加賀さんは語った。



ユニークな作品の数々。「関西人の血が面白さを求めている」と話す



準喫茶カガモクの店内。至る場所にこけしが隠れている、遊び心満載のカフェだ



「大学卒業後の全ての経験が今の生活の力になっています」と笑顔で話す



準喫茶 カガモク

自家焙煎のコーヒーと、地元豆腐店のおからを使ったドーナツなどを提供する。加賀さんが手掛けたこけし雑貨の販売や、木工ワークショップなども行っている。
金～日曜日営業、不定休

■所在地
大崎市鳴子温泉字川渡 49
TEL 070-5540-7150
<http://kagamoku.coccotune.net/>

